

父・哲夫（左）が自宅の庭に創設した道場は20年目を迎えた昨春、息子の司（右）に受け継がれた

道場紀行

15

静岡県・裾野市
清流館山縣道場

文／永田千恵
写真／高塩隆

裾野は広く、 頂きは高く。

西の富士山、東の箱根の山々のふもとを
横に細長くつなぐように広がる裾野市。

快晴ならば、富士の美しい稜線をどこからでも臨むことができるという。
日本一の霊峰に見守られるこの町に、親子二代で営まれる
個人道場がある。学校教育に馴染めない子も受け入れ、育成してきた
町の道場に、地域住民が寄せる期待と信頼は厚い。

取材前日、関東甲信越地方では雪が降り、東京では3月として7年ぶりの積雪を記録した。その影響だろうか。晴れていれば正面には雄大な富士、東には天下の剣・箱根の山という“これぞ日本の風景”といった景色が臨めるはずだが、この日、霊峰は残念ながら厚い雲の向こう隠れてしまっていた。

この地に清流館山縣道場ができて今年で21年になる。それ以前ここには道場がなく、開設者・山縣哲夫は中学時代、片道50分かけて町道場まで通わねばならなかったという。好きな柔道のためとはいえ、明かりの乏しい夜道を約1時間歩くことは心身ともにきつかった。それが「いつの日か自分で道場をやりたい」という夢を抱くようになる最初のきっかけだ。やがて中学校の教師となり、忙しい毎日を送るようになったが、道場開設という思いは変わらなかった。それどころかむしろ、教師という職業が思いを強くさせたのかもしれない。柔道は、教員の本分である人づくりにつながるからだ。

35歳になったとき、ついに夢は現実となる。思いの詰まった道場は“清い

汗を流した者のみが人としての成長を続けられる”という意味を込めて、『清流館』と名付けられた。

「町道場を始めるということは、公立の教員として前例のないことだったので、よく『二足のわらじを履いて大丈夫か?』と心配されました。もちろん、公立の教員ですから、ボランティアでやらなければならない。そのうえ仕事も忙しかったので、それはもう大変でしたよ。それでも、柔道を地域の人たちに広く伝えたかったし、柔道の持つ良さである、精力善用、自他共栄の精神を日々の稽古を通じて多くの人に伝えたかったんです」

宣伝は一切せず、近所の子供たち4、5人でスタートした。仕事があるから練習は今も昔も週3回、夜の7時から9時半まで。「柔道が強くなることは人として社会人として、健全な精神を持ち、生涯、人の道を学び続けること」という理念のもとで指導した。教育者が営んでいることも手伝ってか、次第に地元の人々の信頼を得て、生徒は口コミで増えていった。この21年間でここから巣立った子供は200名以上を数

えるまでになった。そのなかには注意欠陥多動性障害、学習障害といった学校教育では十分な対応を望めない障害を持った子供たちも含まれている。「清流館なら何とかしてくれるかもしれない」と、一縷の望みを持った親たちが頼ってくるからだ。こうした子供たちにも分け隔てなく指導を行う。50畳ほどの小さな道場だが、指導者が分担して目を配り、徹底した補助・補強運動を行うことで、これまでほとんどケガ人を出していない。

こうした山縣の活動に刺激を受け、徐々に個人で道場を営む人も近隣に増えてきた。当初の目的であった地元で柔道を普及する活動は確実に実を結んでいる。しかし、山縣は言う。

「うちの道場には強くなりたいと思っている子もいるけど、障害を抱えた子もいるでしょう。しかも、指導者はみんな仕事と両立させながらやっているのだから、指導には限界があるんです。だから、素質を持った子が現れても、県大会で上位に食い込むことが精一杯。本音を言えば、やるからには強くしたいという思いもあるんですよ」

教育者であり柔道の指導者でもある山縣だからこそのジレンマだった。

そんな道場に昨年、変化が訪れる。中学時代から実家を離れ、競技柔道に揉まれてきた三男・司が13年ぶりに帰ってきたのだ。これを機に館長の座を息子に譲ることを決めた。そこには「自分のこれまでの環境を生かして、強い選手を育てるような要素も取り入れられるのではないだろうか」という期待もあった。司は最初、道場を継ぐことにはためらいがあったと言う。

「道場を継ぐと好きなことができないじゃないですか。兄も2年前から地元で接骨院を開いていましたので、兄が継ぐのかなとも考えていましたし……。自分が館長になることは兄弟で話し合ったわけでも、父と話し合ったわけでもないんです。でも結局、自然な流れで、自分がやることになりました。やっぱり子供に教えたいという気持ちが



小学生の基礎体力作りはしっかり行う。ひと通り稽古をしたあとはダッシュで締めくくり

あったんですね」

こうして昨年、24歳という若き館長が誕生した。とはいえ、新たな指導方針を打ち出したわけではない。ただ自らが競技柔道の出身であることから、自然に指導はより厳しくなった。

「小さい頃が一番身につくときだから」

と幼稚園児にだって200

本の打ち込みを行わせる。

基礎も乱取りも2時間な

ら2時間、徹底的にやる。

だからどんな小さな子も

自分より大きなお兄さん、

お姉さんの胸を借りて、

速くて正確な打ち込みを見せる。その

姿はなんとも微笑ましく、そして圧巻

だ。現在の入門者は45名。これまでの

ところ、新館長になってからやめた子は一人もいない。

その一方で、保護者のなかには厳しい指導に戸惑いの声もあがる。「柔道を習うのではなく、清流館で学ばせるために通わせているのに」と、これまでの教育柔道を期待する親もいるから

学校教育に馴染めない 子供たちも受け入れる。 町道場の役割を守り続けて

だ。そうした人たちとは、分かり合えるまで話し合った。こうした一方通行ではないコミュニケーションの回り方が、司の指導の特長である。始めた当初、親と子の気持ちを知らうと、司はすべての子供たちの親にアンケートをとった。試合の結果にこだわるかどうか。親が望む目標、子供が望む目標。練習後に子供が発する言動、親がよく子供に対して言う言葉は何か。など、その質問は多岐に渡る。

父の山縣が掲げた「大きな声であいさつをする」、「掃除は汗が出るほどていねいに」というこれまでの道場心得に「悩みや不安なこと、嬉しいことは素直に声を出して言う」「物事はすべてプラスに考える」という文章を加えたのも司だ。

一人ひとりの意見をどれだけ活かせるか。明確な指導方針はなくとも、そのことについて司はこの一年間いつも考え続けてきた。今春には、司は専門学校に通い、臨床心理士の資格を取るといふ。これも、なにより指導に活かせると思ったからだ。

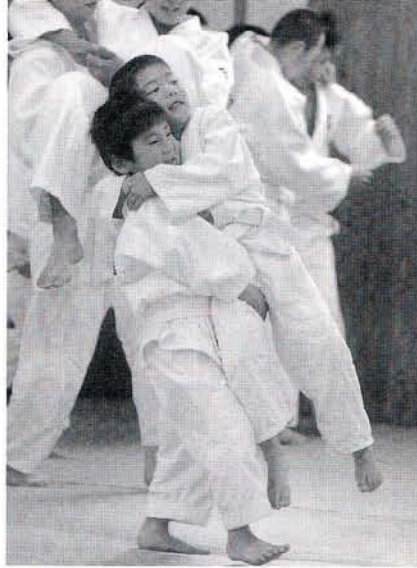
「親子で指導法など語り合ったことはないんですよ」と父は言ったが、やはり、この親にしてこの子あり。根底には同じ気持ちが流れている。

真摯な姿勢は子供に伝わる。子供たちは、柔道が、司先生が大好きだ。志村研悟(小6)は「先生に怒られたことはあるけど、それは僕がふざけたから。この間、『強くなったな』ってほめら

道場紀行

静岡県・裾野市
清流館山縣道場

裾野は広く、 頂きは高く。



相手と触れ合わなければ始まらないのが柔道の良さであり楽しさ



←創設当時から山縣とともに指導に携わってきた大場は、幼児たちのサポート役を担う



←自宅に隣接する道場は手入れが行き届き、さっぱりと整えられている。日本代表のユニフォームを飾っているのは「こういう世界とつながっていることも知ってほしいから」



↑200本は行うという打ち込みは形もしっかりしていてスピードがある

れてうれしかった」と言い、福井優妃(小4)は「練習は厳しいけど、柔道大好き。特に好きなのはいろんな技ができるから赤帯(乱取りのこと)かな。得意技は背負い投げ。近頃バランスが良くなってきたよ」と元気に語った。

こうして新米館長の一年は瞬く間に過ぎた。この春にはこれまで市の講師として勤めていた中学を退職し、民間企業に就職する予定だという。父は公立の教員で大会遠征もままならなかった。会社勤めならば、少しは時間のやり繰りができる。いよいよ競技柔道に

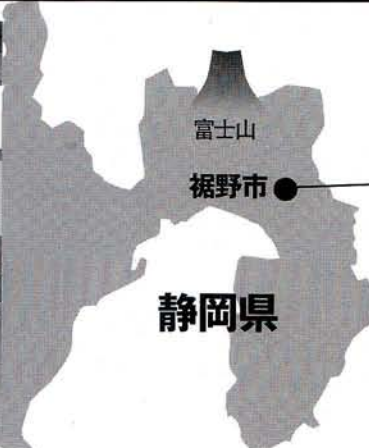
本格的に取り組むのだろうか? そう思って、これからの目標を尋ねてみると、司からはっきりした答えは得られなかった。その理由は取材を終えた2日後に送られてきたメールで判明する。「今日あった裾野市主催の招待試合の結果を報告したくメールしました。団体戦、個人戦と幼稚園児から一般まで、17階級あるなかで、14階級で清流館の生徒が優勝し、閉会式が清流館で埋まりました。(中略)この一年の行いが良い結果に出て内心ホッとできました。取材の日はまだ試合前で結果が出てい

なかったのですが、はっきり話すことはできませんでしたが、精神と勝負、このどちらにもこだわって突き進む自信となりました。私のしななければいけない目標が見えた気がします」

これまでずっと、霊峰・富士の裾野を見つめてきた。開設して21年、そろそろ、その日本一の頂を目指してもいい頃だ。土地にしっかりと根付き、子供たちをその懐に抱いてきた清流館。その礎を大切にしながら、新たな方向へと静かに動き始めた。

(文中敬称略)

DOJO DATA



清流館山縣道場

練習場所 静岡県裾野市深良1764-1
最寄駅 JR東海道新幹線三島駅、JR御殿場線岩波駅
練習 毎週月、水、土曜日
会費 月3000円
創立年 1982年(昭和57年)
代表者 山縣 司
連絡先 TEL・FAX055-997-2779
 ytsukasajudo@yahoo.co.jp